

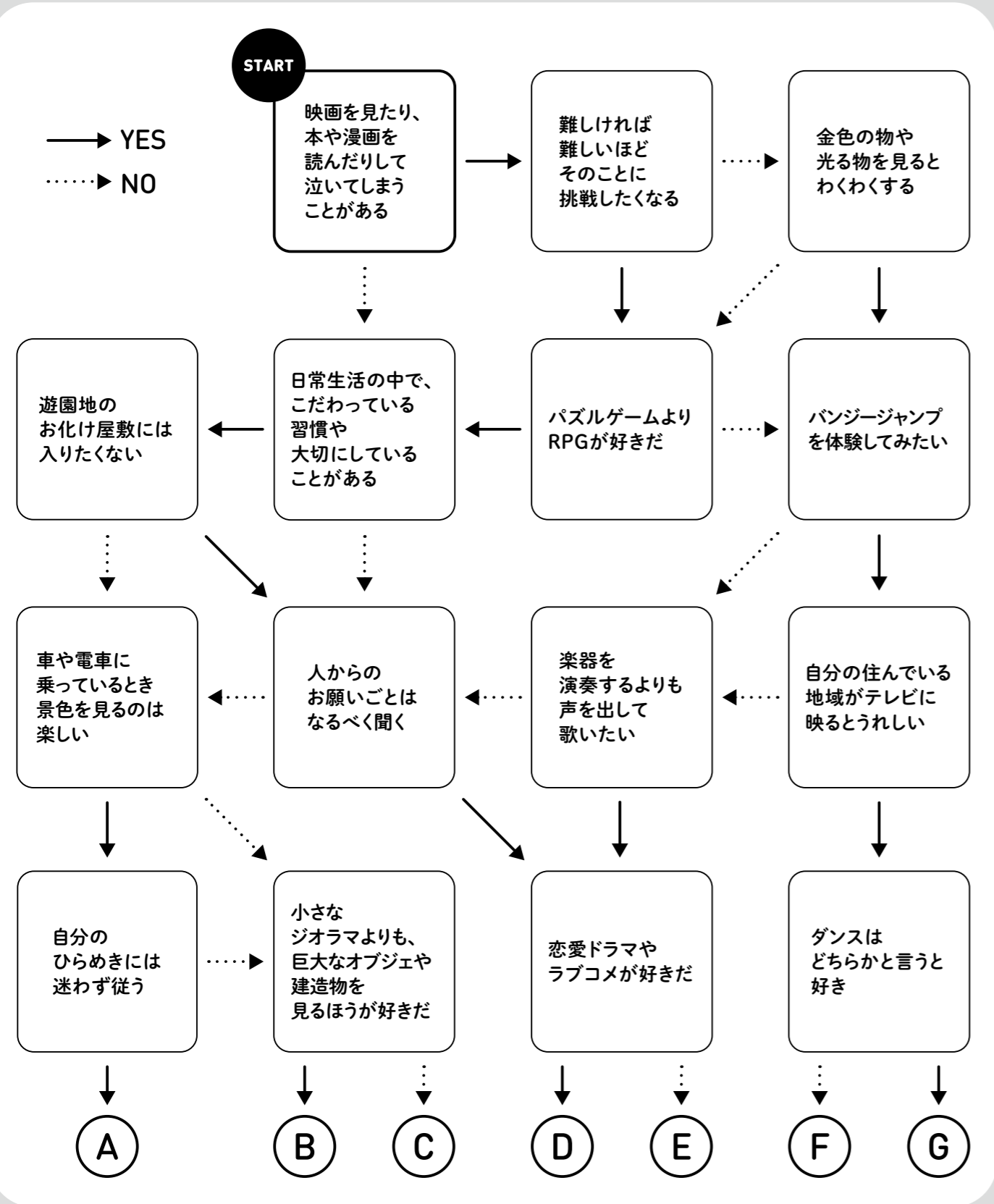
音楽診断

第13回 ショパンの名曲編

『ヴァン』オリジナルでお届けする音楽診断企画の第13弾。
7つのショパンの名曲の中から、あなたにぴったりの作品をご紹介します。



監修・解説 = 山田治生
Text = Haruo Yamada



フレデリック・ショパン (1810~1849年)

ショパンは「ピアノの詩人」と呼ばれ、その作品はピアノ音楽の代名詞のように言われている。多少の歌曲や室内楽曲があるものの、彼が書いた作品のほとんどがピアノ・ソロのためのものであった。交響曲やオペラなどは残さず、最も規模の大きな作品は2曲のピアノ協奏曲であった。ワルシャワ近郊で生まれ、ワルシャワ音楽院で学んだ後、パリに移り、ピアニスト兼作曲家として、パリのサロンを中心に活躍。作家ジョルジュ・サンドとの恋愛が知られている。肺結核のために39歳の若さで亡くなり、再び祖国の地を踏むことはなかったが、ポーランドへの思いは強く、ポロネーズやマズルカなど、民族音楽を採り入れた作品を数多く書いた。



あなたにぴったりの作品は？

A 美しく劇的に駆け抜ける
『幻想即興曲』(『即興曲第4番』)
(作曲年: 1834年頃)

『幻想即興曲』のタイトルは、ショパンの死後、出版に際してつけられたものである。ショパンの4つの『即興曲』のなかでは最初に書かれた。主部は、右手が流れるような16分音符、左手が8分音符の3連符、と左右で違うリズムが交差する。中間部では美しい旋律がゆったりと歌われる。そして主部の再現。コーダで中間部の旋律が回想される。1834年頃に作曲された。デステ男爵夫人に献呈され、そのとき、ショパンは出版を意図していなかったという。



B 未来に思いを馳せて書かれた自信作
『ピアノ協奏曲第1番ホ短調』
(初演: 1830年/ワルシャワ)

『ピアノ協奏曲第1番ホ短調』は、ショパンがまだワルシャワにいた1830年に、『ピアノ協奏曲第2番へ短調』に引き続いて書かれた。番号が作曲の順番と逆になったのは、ホ短調の協奏曲がへ短調の協奏曲よりも先に出版されたためである。20歳のピアニストが自作の協奏曲を携えて西欧への進出を考えていた頃の野心的な作品。オーケストラの堂々とした序奏で始まる第1楽章、ゆったりとした第2楽章、ポーランドの民族音楽風の主題も現れる第3楽章の3つの楽章からなる。



C 愛くるしい小犬を描いた軽やかな音楽
『小犬のワルツ』(『ワルツ第6番』)
(作曲年: 1846~1847年)

作品64の3曲(第6番、第7番、第8番)のワルツは、ショパンが晩年(1846~47年)に書き上げたものである。第6番の『小犬のワルツ』のニックネームは、恋人ジョルジュ・サンドの愛犬が自分の尻尾を追ってくる回る姿を描いているというエピソードから、後世の人によってつけられたものである。作品はデルフィナ・ポツカ伯爵夫人に献呈された。彼女は、パリに着いたショパンをもてなし、ショパンにピアノを習ったりした。



D とびきりのメロディーを堪能
『別れの曲』(『12の練習曲作品10-3』)
(作曲年: 1832年)

ショパンの最もポピュラーな作品の一つである『別れの曲』は、『12の練習曲作品10』の第3番にあたる。1832年に作曲された。もともとは「ヴィヴァーチェ」という速いテンポで構想されたが、出版に際して、ショパンは「レント」という遅いテンポに変更した。彼の作品の中でもとびきり美しい旋律が魅力的である。その旋律は映画やポピュラー音楽でも使われるなど、広く親しまれている。中間部では転調が激しくなり、音楽が高揚する。



E シューマンも好んだ物語風の作品
『バラード第1番』
(作曲年: 1831~1835年)

ショパンの『バラード』は全部で4曲ある。ピアノ曲での「バラード」というジャンルはショパンが始めた。第1番は1831~1835年にかけて作曲された。ゆったりと低い音域から高い音域へと広がっていくラルゴの序奏で始まる。そして少しテンポを上げてモダートとなりメランコリックな第1主題が提示される。優美で繊細な第2主題はその後情熱を帯びる。フィギュア・スケートの羽生結弦が使用した曲としても知られている。



F 圧倒的な技巧派の友人リストに献呈した
『革命のエチュード』(『12の練習曲作品10-12』)
(作曲年: 1831年頃)

『練習曲(エチュード)』とは、本来、技巧の鍛錬のための曲であるが、ショパンの『練習曲』は、高度な芸術性も兼ね備えている。『革命のエチュード』は『12の練習曲作品10』の第12番にあたる。ショパンが、1831年に祖国ポーランドを離れたのち、11月蜂起の朗報を聞くものの、パリに向かう途中、ロシア軍のワルシャワ侵攻と蜂起の挫折を知り、怒りのあまり、書かれたといわれている。ドラマティックな音楽だが、左手の16分音符の練習曲でもある。



G エネルギーに満ちた最高傑作
『ポロネーズ第6番《英雄》』
(作曲年: 1842年)

『英雄ポロネーズ』は、ショパンの最高傑作の一つ。非常に高い演奏技術が必要とする。明解で、力強く、ポジティブな音楽である。1842年に作曲された。ショパンにとっては後期の作品である。ポロネーズとはポーランドの代表的な民俗舞曲の形式。『英雄』の愛称は作曲者によるものではない。半音階を含む印象的な序奏の後、華麗に主題が提示される。中間部での右手の優美なメロディーと左手の16分音符の連打との対照が効果的。



山田治生 (音楽評論家)

1964年、京都市生まれ。1987年、慶應義塾大学経済学部卒業。著書に『トスカニーニ〜大指揮者の生涯とその時代』、小澤征爾の評伝である『音楽の旅人〜ある日本人指揮者の軌跡』、『いまどきのクラシック音楽の楽しみ方』(以上、アルファベータ)、編著書に『戦後のオペラ』(新国立劇場運営財団情報センター)、訳書に『レナード・バーンスタイン ザ・ラスト・ロング・インタビュー』(アルファベータ)などがある。